

まえがき

本書は、明治の初頭から 20 世紀末に至る間の「日本における豚の改良増殖の歩み」を出来るだけ正確に記録して後世に遺し、21 世紀を荷う人達の参考となることを念願して編述したものである。

しかし、養豚全般にわたる事項には、改良増殖以外に飼養管理、飼料、環境問題、衛生、産肉、食肉の取引と利用、経営等多くの分野があり、又それらに基礎的諸問題（試験研究）と実際の諸課題（実地経営、実技の経験等）がある。そのほか最近では国内のみでは問題解決が困難となり、諸外国との関連が複雑となってきている。このような情勢下で、それらのすべてに熟達することは至難の業であり、一生を捧げてでも到底不可能であろう。

筆者は、昭和 11 年（1936 年）学窓を出て直ちに農林省畜産試験場に奉職してから今日（平成 12 年、2000 年）までの 64 年間、養豚に関する業務（試験研究、教育、普及等）に従事する生涯に恵まれた。しかし、よく考えてみると養豚全般にわたっての技術は極めて広汎で、奥深く一生勉強の連続であることに気付く。

今回、本書の編述に当たって顧みると、内容に責任をもって記述し得るのは、直接、間接に自らが実務に係わってきた上記 64 年間（1936-2000 年）の出来事のみであって、それ以前（1900~1935 年）の状況については、諸先輩から承ったお話と文献に頼らざるを得なかった。改めて歴史の重さと経験の尊さを実感させられた次第である。

実を申せば、筆者が携ってきた豚に関する試験研究・調査等のデータや内外の関係書類、各種の会議資料等は夥しい数に上り、古びた資料も多いが、筆者自身には棄て難い愛着と思い出があって到底処分するには忍びず、梱包のまま幾度か筆者と共に移動して今日に到っている。

しかし、時代は容赦なく移り、技術は日進月歩であり、社会環境の変化は実に目まぐるしい。加えて昨今、筆者自身、体力の限界を予感するに至ったので、この際内容は決して十全ではないと知りつつも、現在までの記録を出来るだけ整理して次世代の方々に引き継ぐべき時期に来ていることを痛感し、それには 20 世紀の終りを区切りとすることが適当と考えるに至った。

この小著が、今後のわが国養豚の発展に尽力していただく方々に聊かでもお役に立つならば筆者の光栄これに過ぐるものはない。